
エデンプログラム～Eden Program～

カピパラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンプログラム (Eden Program)

【Nコード】

N0322W

【作者名】

カピパラ

【あらすじ】

一度崩されて崩れた直後から作り直しを選択した世界。
そこで住む人の昨日と明日と現在はどこへ行く？

設定く世界、種族、力についてく

「ここでは、この物語の背景や用語等を解説していくぞ。因みに本編ではまだ出てなくてもいずれ出すというような感じだ。解説者は【六角天】総首領にして、【八席】第零席の吉田 守霧と。」

「首領補佐兼、【二十六文字】三文字目の成城 藍がお送りいたします。」

世界について

「まずこの世界についてだが、簡単に言うと球状の形をしていて、外側から、《最外殻世界》、《外殻世界》、《内殻世界》、《原点世界群》と分けられ徐々にだが広がっていることも確認されている。」

「首領、私は分かっていますが、役割的に私が質問側らしいので質問します。私は分かっていますが、役割的に私が質問側らしいので質問します。大事なことなので二回言いました。」

「うん、分かったからさっさと質問して？」

「どんな世界が広がっているとのことですが、広がりすぎて世界の限界にぶつかるといったことは無いのでしょうか？」

「うーん、厳密には分からないけど世界は？際限なく広がりつつける？という『理』があるから、箱のような形で限界があるとして壁にぶつかったとしても、世界はその外側に「まだ世界が広がる余地がある」

と認識して壁を無かったことにする習性があるんだよ。」

「御回答ありがとうございます。では続きをどうぞ。」

「ま、物語でよく舞台になる（予定）の《原点世界群》の説明から入ろうか」

—— 原点世界群について

「世界のちょうど中心に位置している十一の世界のことです。さらにその中でも中心にあるのが《原点世界》」

「この世界はかつて一度『神』^{カレ}と呼ばれた男によってその際に関係性があつた他の十の世界とともに【崩天】によって壊された世界でその後崩壊した事実を認めて再構成した世界。すでに滅んでいるが故に“滅び”には直面しないが、“危険遺跡”が“滅び”の代わりとして顕れる。また、すべての世界の観測が可能なんだよ。でもつて、【崩天】の際に崩壊したほかの十の世界も一緒に【再構成】したから以前よりも密接な関係性になっているけどね。」

「首領、そういえば以前部下から「原点世界群には知られていないもうひとつの世界がある」という噂があるんですけど本当ですか？」ときかれたのですが。」

「うーんこの際だから言っていいいかな。せっかくだから、藍君どうぞ。」

「はい。『知られていないもうひとつの世界』とは【崩天】が行われた後に世界の【再構成】を行うモノの代表争いである【大戦争】^{だいせんそう}」

の場であり、また『神』と『生き残り』の生存を賭けた【大戦】おおいくさの最終決戦地である世界であります。」

「うん。付け加えるならたびたび行われているく上層部会議の場所もここだっていうぐらいかな？今はあんまり使われていないけどね。お世辞にもきれいな世界とは間違ってもいえないからね。」

内殻世界、外殻世界、最外殻世界について

「まずは一通り説明していこう。」

＜最外殻世界＞

その名のとおり球状世界の一番外側に位置し、常に広がり続け一つの世界が一点に特化している世界しかし、最も？滅び？に直面し続ける世界。なお、世界が不安定であるため進みすぎた技術が発展、もしくはすでに滅んだ世界から失われた技術ロストテクノロジーが送られることがある。

「また、世界が少しでも不安定なのを直すために平行世界がひとつの結果に向かって進みやすいのもこの世界の特徴だよ。」

「首領、一点に特化とは？」

「簡単に言うと、未来に進む技術（例…科学）と過去から進む技術（例…魔術）が交わらない。といったところかな？」

「なるほど」

<外殻世界>

最外殻世界に引っ張られる形で広がる世界。一点特化という特性は失われているものの両立による技術の発展が進んでいる世界。最外殻世界よりも少ないものの突発的に？滅び？に直面することがある。

<内殻世界>

最外殻、外殻世界よりも劣るが広がり続けている世界。正反対方向の技術の両立がよく成立している。まず？滅び？に直面しないが、一度？滅び？に直面すると取り返しのつかなくなる場合が多い。

「世界についてはこんなところかな？」

「有難う御座います、首領」

種族について

「次は種族についてだけど、大きく分けて主に四種類の種族が居る。まずは『第一種族』についてだけど、特徴は

- ・ 肉体を持つ
- ・ 自己意識を持つ
- ・ 意思疎通が可能
- ・ 単体での生活が可能
- ・ 個体ごとに持つ価値観などが違う

大きく上げてこの四つが特徴といえる種族だね。

《原点世界》の？人類？、《第一世界》の？森の使徒？とかがこのカテゴリーに入るよ。」

「首領、その条件を満たしておれば人型でなくともいいのですよね。」

「もちろん、《第五世界》の？神狼族？も第一種族だからね。」

「次は『第二種族』についてだよ。
第二種族の特徴は

- ・肉体を持つ
- ・自己意識を持つ
- ・意思疎通が可能

ここまでは第一種族と一緒にんだけど

- ・集団で一つの意識を持つことが可能
- ・群体での生活が可能
- ・破損した一部を他の部分で補うことが可能

っていう『第一種族』とはあまりにかけ離れた特徴があるんだよ。」

「首領、破損した一部をく他の部分で補うことが可能＞この部分からこの種族が世界で最も繁栄した種族になってもおかしくはないと思うのですが、一度もこの種族が繁栄したと歴史には載ってないのですがそこはどうなのでしょう。」

「彼らは群体にいるからだと思うけど、無理に勢力を広げるといっ

たことをしない傾向にあるんだよ。それに繁栄した種族がないわけではないよ。たとえば、《第七世界》の？草藻？なんか《第七世界》そのものが？草藻？のためにあるっていてもいいくらいだよ。」

「次は『第三種族』なんだけど、この種族は分からないことが多いんだよ。」

「不明な点はいいので分かっている所だけを教えてください。」

「じゃあ分かっている特徴なんだけど

- ・肉体を持たない
- ・意思疎通が可能
- ・単体での生活が可能
- ・個体ごとに持つ価値観などが違う
- ・集団で一つの意識を持つことが可能
- ・群体での生活が可能

こんなとこなんだけど、これは種族ごとに所々違うんだよ。

さらに『全ての種族』に置いて言える事なんだけれども、必ずしもそうであるというわけではないんだよ。」

「続いて『第四種族』についてだけど、この種族に関して言える事は、

- ・概念生物であること

この一つだけなんだよ。それに今はもうこの『第四種族』は絶滅し

てるし。」

「そういえば、『第八階層』『管理者の世界』は元『第四種族』モノでしたね。」

「彼らは【大戦争】において負けたからね。彼らの役割だった『神』という存在が【再構成】で否定されたしね。」

「否定したのはあなたでしょう。」

「さっさと次に行こうか？」

「露骨に話題をずらしやがりましたね。」

「給料減らされたい？」

「次に行きましょう。」

—— 力について

「次はこの【セカイ】における？力？の特性について説明していただく。」

「【セカイ】には？力？がありそのうちの特性がお互い干渉して大きく分けて四つの？力？がある。でしたっけ？」

「君って質問役じゃなかったっけ？」

「いい加減飽きました。質問もしますけど、それ以上に好き勝手に

動きたいです。」

「まあいつか。んで、？力？の説明に入るよ。
まず下からんだけど細かく分けるときりがないから《四大要力》
から上のみ説明してくよ。」

・？力？

セカイを構成するモノ。？力？を？力？のまま振るうことができる
のはごく一部のみ

【二十六文字】の上位から上の構成員は全員使えるけど、それ以外
だとあんまり数はいないね。」

「首領、疑問なんですが？力？を振るいすぎてセカイが崩壊するっ
てことはないんですか？」

「ないよ。何でかは分からないけどないってことだけは言える。」

「そうですか。まあ、たとえ滅ぶといわれてもそれが本当とは限り
ませんしね。」

「次は循体についてだけど

・『循体』

世界循環体の略称。矛盾因子を含む物質。これが生命体の体内や《
流脈炉》などを通じて初めて術式などに使われる循体燃料に変換さ
れる。」

「また循体はどんなところにもあるけど循体が多く集まって流れてい
る所は《流脈》って呼ばれているよ。」

「首領」

「なんだい？」

「眠いです。」

「気合いで起きろ。」

四大要力について

「『四大要力』は魔力、呪力、導力、霊力の4つを表すから『魔力』『呪力』『導力』『霊力』の順に紹介しよう。

・『魔力』

循体を魂または体内に取り込んで己の持つ属性の色に染め上げたものの。魔術や魔法等が主な使用方法。

・『呪力』

循体を己の持つ性質で塗り上げたもの。主に占術、仙術、複合魔術（例…陰陽術）他に高位魔術を行使する際に使われる。最も広く他の力に対して代用ができる。

・『導力』

循体を己の持つ特性で叩き上げたもの。主に錬金術、精霊術等に使われる。特性で叩き上げたものであるため扱い方が難しい最も“理”の改竄や“概念”の精製もしくは改竄が行いやすい。

・『靈力』

循体を己の魂に取り込んで己の持つ法則で固め上げたもの。主に靈力のままに使用したり、シャーマニズでの術や神道でも使われる。他の力に比べて“力”に最も近い。

これくらいだね。」

「でも現在は機動殻兵器を使用する事で循体燃料を使って術式を使用する方が多いと聞きますよ。」

「でも『四大要力』のいずれも満足に使えない術師は機動殻兵器を使っても所詮は雑魚オムツってことだよ。【六角天ウチ】の【第三席】が言っていたけど『術師は機動殻兵器がとれて初めて一人前』って」

「《術式皇》のトレインⅡフルバティが？」

「そう、でも格闘術師俺達じゃあまり大差がないように思えるけどね。」

「力に関してもこんなもんでいいね。」

「それでいいかと思われます。」

零本目（前書き）

特に意味は無い零本目です。

零本目

空を高く感じる秋の夜空。

まるで本物のような立体映像の空に浮かぶ月に照らされているここは海拔2000メートルの上空に半球からさらに下の部分を四分の一ほど切り取ったような形で浮かぶ科学と神秘と世界法則で造られた都市『東京圏上空浮遊都市』通称『新東京』の第三階層にある歓楽街エリアと企業エリアを結ぶメインストリートの一つ。

まだ、残業している人々がいると思われるビルから漏れる蛍光灯の光やまだ営業している店の明かりが窓ガラスによってまるで真ん中を中心に割れたかのように光を反射されている。

そんな中でたむろしている数人の若者の中心で一人の金縁で彩られた法衣を着た男が熱弁を振るっている、

“私達が今住んでいるこの世界は主たる神の神罰によって滅びた。”
“しかし愚かな生き残り共が主たる神を殺してこの世界を創り直してしまった。”

“私達は主たる神のためにこの世界を壊し主に捧げなければならない。”

しかし、それを聞いても若者達はこう返す。

“うん。それで?”

今は『崩天事変』から七十九年も過ぎている。『崩天事変』はほと

そんなこと

んどの人間が知っているし、そんなに恐怖もない。

何よりここは空中都市『新東京』。此処にはもっとネジのぶっ飛んだ奴が居るのだ。その程度笑われてしまう。

これは崩れてもう一回作り直した世界の人々の営みの記録である。

結論――――ハジマリ

一 本 目（前書き）

喜劇？悲劇？どんなになるかは分からないけど、始まります。

一 本 目

サーカステントの灯りが消えた。

隣の客が興奮するのがなんとなく解る。

私はポップコーンを食べながらコーラを飲んでステージを見つめる。
司会（？）が会場を盛り上げながら何か叫んでいる。

周りが話し、叫び、笑いながら拍手している。

おっと、自己紹介を忘れていた。私／俺の名前は“ハウツハルメー・ドルトメルド”なんって言ってみたり、嘘だけど。

本名は吉田^{ヨシダ} 百夜^{モモヤ}だ、父（養父）は『あくまでギリギリ一般人』父の同僚は『普通と特殊の境界線が消えてしまったニンゲン』と笑いながら言われ、組織の同僚からは『一般人から進化したモノ』なんて呼ばれる。

そんな私／俺の役割は『処刑人兼選別者』。

切って裂いて割って潰して殴って轢いてとにかく殺す。そんな役割。

私／俺の役割『処刑人兼選別者』は七十九年前に起きた《崩天事変》で第一階層の『普通の世界』までは及ばなくても他の階層では通じるようになっていいる一応“世界”のバランスをとる為の役割となったからだ。

ちなみに《崩天事変》は第一階層でも基本的に知られている。《崩天事変》とは一人の“神”を名乗るキチガイによって起こされた事件でこの事件を機に多くの能力者や魔道に通じるモノや超科学に走るモノが急増した事件でもある。《崩天事変》前と後では多くの新

法則が生まれていて、《崩天事変》前の兵器では一部意味を持たなくなってしまうものもある（例としては大陸間弾道ミサイル、戦術核といったものからレーダー（これは改良が加えられ使えないのは旧式のみ）などといったものの威力不足などの理由で一部拳銃）。またこれを機に今までより第二階層以下の階層に潜るモノが増えた事件でもある。

また、《階層》とは社会的、能力的、影響力的に区分された世界のことでもある。

《第一階層》 『普通の世界』
《第二階層》 『権力の世界』
《第三階層》 『財力の世界』
《第四階層》 『魔道の世界』
《第五階層》 『超科学の世界』
《第六階層》 『宗教の世界』
《第七階層》 『暴力の世界』
《第八階層》 『管理者の世界』
《第九階層》 『生き残り達の世界』

といったようにそれぞれが重なりながら散って存在している。
まあ、今はサーカスを楽しもう。

—— 結論。休暇中

二 本 目（前書き）

一週間に一度は更新できるようにがんばります。

二本目

私が同僚に今面白いサーカスがあるとと言われて来てみたのだが、……まあ、割といいんじゃないかな？

「あれ？つまんないの？」

今声をかけてきたのが同僚の塔霧トウギリ 累だ。ルイ

赤い髪と青い目を持つ女。胸はデカイ。

同じ組織【六角天】に所属する“予報士”で、二つ名も持っている程強くもある（ちなみに殲滅詩人^{ルナティックデリート}）。しかし、コイツはせっかく予報しても報告しないことが多い。そのせいでしょっちゅう減給をくらっているらしいが……。

そして、何より俺にとって重要なのはコイツは私／俺によく厄介事を運んでくるアクマということだ。

以前もコイツに休暇中に一緒にどこか行こうなんて言われてついに行ったらその行き先ではいくつもの？機神？（型遅れもいいとこだった）やM・FやらA・T（これらも同じく型遅れだった）を保持して企業の解体領域から国家に戻ろうとするテロリストどもが待っているなんてことがざらにあるような女だ。

？機神？とは

かつて『生き残り』と『神』の間で起こった【大戦争】の際に生き残り側が対巨大神族用に造りだした『機械仕掛けの神殺し』のことで搭乗型・融合型の二つがあり、大型高速戦艦、機動兵器、超大型

機動要塞などと並び【大戦争】での戦力の一部を担った人型機動兵器。操縦難易度は難易度順に搭乗型・融合型となっている。

「融合型」は機神と文字通り一体化して戦うタイプ。そのため機神が傷つけば一定の割合で自らも傷つくが、機神自体を自らの体として扱える。

「搭乗型」は機神に搭乗することで機神を操るタイプ。非常に高い操縦難易度を持ち搭乗のために大型の機神の割合が多くなるが、機神が撃破されない限り戦うことが可能。

アーマード・タンク

? A・T? とは

E₁ C

マルチ・アーマード・タンク

極東暦22年に配備が開始された多目的武装戦車（略称…A・T）のことで多くは人型をとっている。

マルチ・ファイター

? M・F? とは

E₁ C

極東暦47年に始まった【解体戦争】において【企業連盟】が対国

マルチ・トラディショナル・ファイター

家用に使用した人型強襲機動兵器でもある多目的戦術戦闘機（略称…

M・Fまたは戦術戦闘機）のことで機神とA・Tを参考に戦闘機のように量産性に優れ制空権を確保できるように開発された機体。人型強襲機動兵器とあるように基本は人型であり、また強襲能力が非常に優れている。

「まあ、今はつまんなくてももう少ししたら面白いことになるよ。」

ホラな？

……

.....

—— 四十分後

コイツの言う通りこれからがメインらしかった。コイツにしては珍しいと思い「ありがとな。」と札を言ったら

「えゝ？ まだだよゝ？」

という言葉と共に

キャアーーーーー

という叫びが聞こえた。

俺は思ったね。ああ、やっぱりロクなことじゃなかった。

—— 結論。確信犯

二 本 目（後書き）

皆さんのこんな能力いいんじゃない？と思うようなオリジナル能力を募集しています。能力名と効果をつけて教えてください。

三本目（前書き）

一つの世界の始まりは、一つの世界の終わりを告げているのだろう。

三本目

その声が何なのか確認するまでもなく解ってしまった。

「静かにしろ、これより王たる我が選別を開始する。」

そこには頭のおかしそうな男が居た。装備しているのは旧時代の銃？意味有るのか？っていうか使えるのか？いや、そういえば何でいまだに旧式銃の需要があるのか聞いたときに養父^{親父}が言っていたな。

「確かに、【第一次統一戦争】【第二次統一戦争】【解体戦争】他小規模な戦争や【危険遺跡】攻略などを通して現在の銃は【崩天】前より遥かに性能が良くなっているのは確かなことだ。だが、世界がそうある理^{ルール}の一端である概念を利用する類の連中にとっては弾に概念を刻み込むだけでいい旧式銃のほうが扱いやすいと思うぞ。」
「ってことは、まさかアイツ概念使いか？」

「デメエ！何者だ！」

やたらガラの悪い警備員の一人が銃を構えながら聞いた。

「あれ〜？おかしいな〜？私の《予報》だところは厨二病患者っぽい人が乗り込んで来るんじゃないかと殺人事件が起これるとこなんだけど〜？」

累が唐突に話し出す。

「珍しいじゃないか累の“予報”が外れるなんて」

「まあ、そうなると相手は“希少級”の達人か“固有級”だね〜。

「…………それは厄介だ、厄介すぎる。」

パンッ

ッと乾いた銃声が聞こえると同時に警備員が全員倒れた。
外傷が一切無いきれいな死体だ。

なるほど概念使いならばこのような芸当も可能な筈だ。しかし、銃声はたった一発だった筈だ。

いくら概念使いとはいえ、いや概念使いだからこそ銃声が一発のみというのはいえない。概念使いの絶対的な理^{ルール}によれば銃弾に書き込める概念は一種類のみの筈だ。

「どんな能力だろうな？」

「《鑑定》しよっか？」

「よろ」

「んじゃ、《鑑定》の最中は守つていてね。」

そう言うとき累は“検索モード”に入った。

まあ、そうしているうちにも抵抗した人が三十〜四十ほど殺されているが、関係ない。

「終わったよ。」

「それでどんな能力だった？」

「『人形化』と『自殺因子』だよ。」

「やっぱり概念使いじゃなかったか。」

「ついでに名前はスザク・フェンナルドだっ」

「はあ？ あいつどう見てもアジア系だぞ？」

「さあ？ 最近流行の転生とかいうやつじゃないかな？」

因みに《崩天事変》以来一部の『管理者』が人を好き勝手に殺して能力を持たせて転生させるという馬鹿な行為に走っている。そういったのはかなりちょーしに乗っている馬鹿が多いし、しかもすぐにバランスを崩すから各勢力に嫌われまくっている。そしてバランスを崩しに崩した『管理者』は即行で殺されている。

それでも俺のすることには変わりはない。

あの勝手気ままに能力を使っているバカを裁いて殺す。唯それだけ。

「んじゃ、後は俺がやるよ」

「今度なんか奢ってね。」

ふざけんなお前が奢れ。

そう思いながらも俺は大きく息を吸って叫んだ。

「その腐れヤロウ今からぶっ殺すからおとなしく死ね！」

……

……

……

あれ？ざわめきすらない？あっ今気づいたけど周りの人みんな死んでら、……別によいや。

テンションを変えてと

「スザク・フェンナルド貴様を裁いて殺す。」

そう言うと同時に俺の足下から影が起き上がり鎧と槍の姿をとる。鎧といってもコートタイプだけど。

「きゃあー、がんはってー（笑）」

うぜー味方だけど超うぜえー。

「ん？その女いいな、完全無欠である主人公の俺の後宮の一員にふさわしいこっちに来い。」

あちゃーイタイ激しくイタイ。てっいうか俺のことは無視？なかなかキツいんだけど。

—— 結論。休日返上

四本目（前書き）

まだまだ募集中です。

感想かメッセージにお願いします

四本目

「どうした？女、早くこっちに来い。」

その言葉と共に世界が凍った。

累は確かにいい女かもしれないが、

この相手は確かに狂っているかもしれないが、

《崩天事変》によってここまで常識が変わっているのかもしれないが、

コイツの言い方は何かおかしい。

まるで、そう言うのが当たり前であるかのような。

そんな言い方。

……まあ、いいか、

って言うか、コイツまだ俺を無視してんのかよ。

「あはは、いや、面白いね。うーん、じゃ、そこの彼に勝ったらしいよ。」

と、いう訳でーモモっち後よろ。」

「ふむ、ならば早々にそこの愚民を殺そう。」

ああ、この疫病神め、自分だけ楽しやがって、いつかブン殴る。
今は仕事だ、頑張ろう。

「さて愚民、どのように死にたい？」

「剣で斬られて失血死か？首を刎ねられるか？体中串刺しになるか？選ばせてやろう。我は偉大だからな。」

「正直俺がいつどこでなぜどのようなにして死んだのかなんてすごくどうでもいいと思うよ。まあ、その中から選ぶんなら、串刺しだけは勘弁してほしいかな。」

「ふむ、まあいいだろう。『起きろ』『その男を限界を超えて磔にしろ』」

そうスザクという男が命令するといつの間にか近くに来ていた死体たちがいきなり百夜の体にしがみついた。唐突に、死んでいたはずの死骸が、体のあちこちが吹き飛んでいようとも、だ。

「んなつ、てこれは君の《人形化》の能力だね。《人形化》は生きた人間も人形に出来るんだからただの死体なんて造作もないか。」

「その通りだ。愚民にしてはなかなか冴えているではないか。褒めてやろう。」

「貴様ごときには惜しいが、我の最強たる証を見せてやろう。」

「『私を構成するは真なる剣』

『我は正義 我は王 我は絶対』

『我が血肉を骨子に 我が望みを用いて剣を編め』

『我は使い 振るい 滅ぼすのみ』

『我が身が最強である意味を示せ』

『心象世界 剣の墓標』」

そういうと同時にスザクから青色に燃える炎の境界が飛び出し瞬く間に私／俺とスザクを覆った。

その世界にあったのは地面に刺さった名剣、魔剣、聖剣、名刀、妖刀、等等どれもこれも歴史から消えていたりするものばかりであった。

その世界のソラは歯車の形になった月と太陽が噛み合いながら回っている。

「貴様が嫌だと言った串刺しにて仕留めてやろう。『浮かび上がり 磔に向かい 刺され』」

ってコイツ人の話、聞いてないな。

そう思った直後、地面から剣が浮かび上がり百夜に向かっていき、刺さった。

それは見事に磔の上からグツサリと深々と。

それでスザクは勝ちを確信したのか自分が勝者であるかのように振

舞い始めた。

「余りにあつけないな、さあ女、我の下に來い。やつは死んだぞ。」

「いやだなくあの程度で百つちが死ぬはず無いじゃん。まだ生きてるよ。」

「あの状態で生きているはずが無いだろう。」

「まあ、見てみなよ。」

串刺しになった磔から黒い染みが浮かび上がっている。刺さっている剣にもだ。

染みはだんだんと広がっていき、磔全体に広がった。

そして累は徐々にその端正な顔を狂気の笑みに染めて言い放った。

「私は言ったよ。あの程度であの殺人官キリング・ジャッジとも呼ばれる吉田百夜が死ぬ筈が無いって。ついでに君に私が殲滅詩人ルナティックデリートと呼ばれる理由を体感させてあげる。」

「『おお狂いに狂った我が力よ、罪深く高慢な彼の者に地獄すら生ぬるい死の判決を』」

その言霊が告げられるとスザクを取り巻くように？ナニカ？の重圧が掛かり消えた。

その途端黒い染みが百夜を磔にしていた人形と深々と刺さった剣を飲み込んだと同時に、黒い影を鎧のように纏っている百夜が立って

いた。

「なっ、何！？馬鹿な！どうしてあの状態から逃れたというのだ！？」

「別に逃れてなんかいないさ、ただ単に剣と人形を影で侵食して飲み込んだだけだよ。」

「それで、これごときが君の最強？　だとしたら滑稽すぎて笑えてくるよ。」

「補足するならば、累が『フエイト・ヴァース運命の詩』を使ったみたいだからな。」

ふと、見渡してみてもどこにも累の姿が見えないことから『フエイト・ヴァース運命の詩』を使ったらどっかに言ったんだろうと結論付ける。

「この《心象世界》は君ごときが使えていいものじゃない。せいぜい《管理者》の一人に特典だの何だの言われてホイホイ貰ったんじゃない？」

百夜の痛烈な言葉は場に冷たく響いた。百夜は《心象世界》を親の仇のごとく睨んでいる。スザクの方もここまで言われるのは流石に腹が立ったのか今までに無いほどの怒気を振りまいている。

そして、微妙な近郊は崩れた。

百夜がスザクとの三十メートルほどの間を一瞬にして詰め寄り振り上げた剣の形に集まった影で首を狙えば、すぐさま近くにある剣を抜き放ち鏢迫り合いになる。

「君みたいなのは接近戦はダメだとばかり思っていたよ。」

「ふん、命令して進ませるだけが能ではない。」

「でも、死んでくれないかなっ。」

「断るっ。」

再び二人は離れた。

スザクが槍でもって突きを繰り出せば、百夜は影を剣の形に集めて切り上げる。百夜が切り上げた剣を加速して振り下ろせば、スザクは盾を手繰り寄せて斬撃を防ぐ。反動を利用して離れた百夜が弓矢の形に集めた影を放てば槍を投げて相殺する。スザクが身長のは倍はあろうかと言うほどの大剣を構え、百夜は長い柄を持つ斧槍を構えた次の瞬間、二人は音を置き去りにして結界内をあちこち動きながら己の得物をぶつけ合う。

二人の動きが止まった時には百夜はコートのような影で編まれた軽鎧で防がれているのに対し、スザクは体のあちこちに傷を作っていた。その事象が信じられないのか怒りに震えながらスザクが怒声を上げた。

「なぜっ！ 貴様は私より有利に居られる！？」

「はあ？ 何言ってるの？」

「この結界内において全ての力は展開と共に解析され、即座に結界に吸収されて剣の形にて『剣の墓標』^{コノ}に保存されるハズだぞ！」

「そんなことか。じゃあ教えてあげるよ。俺の元々の能力のせいもあると思うが、一番大きなのは累の『運命の詩』^{フエイト・ヴァース}だろうな。あいつ

^{運命の詩}

の能力は複数ある未来の結果の内から自分にとって一番都合のいい未来を詠唱して手繰り寄せるいや、無理やりその未来を引手繰る

^{運命の詩}

と言ったほうがいいな。そしてあいつの能力は相手にとって残酷な未来であればあるほど引手繰り易いらしいからな。累のヤツ顔を狂気に染めて笑っていたら？ なら間違いない。かつて四つの都市を壊滅に追い込んだ殺戮女王の頃の笑顔だ。今じゃ【六角天】のおとばけ観察官兼予報士だな。」

「バカな！ その程度で『剣の墓標』が無効化されるわけ無いだろう

が!!」

「それが事実だ。それにこれは元々お前のものではないだろうが。この能力は極東暦69年にウクライナ暫定政府管理下において発生した危険遺跡《薔薇と吸血鬼の森》の攻略中に原種級の吸血鬼と相打ちになった【六角天】第三大隊所属…恒神^{こうがみ みこと} 尊^{みこと}の所持していた固有^{ユニークスキル}能力だった筈だ。所持者ではない貴様が完璧に扱える訳が無いだろう。」

ため息混じりにそう返してやれば、スザクは怒りが具現化しそうな程の怒気を身に纏いながら叫んだ。

「ふざけるな雑種! こうなったら完膚なきまでに殺してくれる。この『剣の墓標』の真の力を見せてくれる!」

「いいよ別に見たくないし。つといっても無駄かな? ここからは俺の奥の手で殺してやるよ。」

「事象を枉げてその内に秘めし力を解き放ちながらヤツを押しつぶせ! 《剣群》ども!」

「固有^{ユニークスキル}能力…利己^{エゴイスティック}的な審判者第三位階に移行。」

その言霊を言うと影が百夜を包み弾けた。中から現れたのは髪が長くなり、眼鏡を掛け、裾が長く縁を白で彩り黒い生地の中を白い蝶が下から羽ばたいている図柄が描かれたコートを羽織った百夜が現れた。

「さあ終わりだスザク・フェンナルド。貴様の全てを【セカイ】に返せ。」

「貴様が死ね! それでこの場は収まる!」

そう言うと二人は同時に詠唱を開始した。

「その内に秘める偉業を開放せよ！混沌を拓きし剣！勝ち続ける者
真名 開放
バー グングニール
レヴァンティンの剣！大神が持つ至高の槍！厄災なす魔の杖！」

「『我は審判者、我に刃向かう全てを殺す。切り裂き、叩き潰し、刃向かう者全てが消えるまで潰し続ける。』」

「総てを貫く光明神の槍！断てぬ物無き絶世の剣！雷神より授与せ
ブリュナーク デュランダル
霊剣 村雨丸 布都御し霊剣！拔けば玉散る氷の太刀！」

「『我が右手には 金の金槌 我が左手には 銀の杭
白金の鎖が反逆者を縛り 大理石の逆十字が反逆者を捕らえる
だろう
私は殺し続けるでだろう 反逆するモノが居なくなるまで』」

「天地を分けし青銅の剣！虹の弓に稲妻の矢！聖人を貫きし聖槍！
ウルリクムニ 星を射落す弓矢
フレイン ロンギヌス腕に刺さりし致命の矢！」

スザクの詠唱が一瞬早く完成し、攻撃を放った。

「『十二に及ぶ至高の兵器、一重二重と重なり続けろ！』」

「『抱かれし絶望』」

攻撃の名を言うと空の果て地平線の果てから数え切れない攻撃の数々。

一瞬遅れて百夜の詠唱も完成する。

「完成（詠唱完了）。

故に『侵し尽くせ』

『偽りの世界を』」

たった一言、そのたった一言だけで百夜が纏っていた鎧からもはや波動といってもいい勢いで出た黒い染みが世界を侵し始めた。

スザクから放たれていた『抱かれし絶望』にあたろうとも減衰せず、貪欲に広がった。

黒い波動が過ぎ去ると、そこには何も無かったのかのように最初と変わらぬ風景が広がっていた。

「バ、バカな！ い、最終奥技抱かれし絶望が敗れただと！ あれは世界をやり直させることさえ可能なんだぞ！」

自分の最終奥技が敗れて明らかに動揺するがまだ戦いの最中であることを思い出し、即座に次の行動に移る。

「っは！ 『刺され』！ 『穿て』！」

その言葉と共に数千、数万の剣が浮かび上がり百夜を目指し飛んでいくが、

「『侵せ』」

ただその一言だけで剣に黒い染みが染み渡り剣を無くしてしまった。しかし、攻撃して再び最終奥技を放つチャンスを伺うしかないスザクは防がれると分かっているにもかかわらず同じ攻撃をするしかない。

「『刺され』！『穿』「見苦しい、もう無駄なだけだぜ。」やらないければ分からないだろう！」

「無駄だ、空を見てみな。」

「空だと？ なっ馬鹿な！？ 何だこの空に広がる黒い線は！？」

スザクの言うとおりで空には無数の黒い線が広がっていた。

「『限定奥義…空覆い』結界などの限られた空間でのみ発動可能な空を通して世界を侵食する技だ。」

「さあ、終わりだ。」

その言葉と同時に鎌状に集めた黒い染みが地面を叩くと、世界が割れた。

—— 結論。圧倒

五本目（前書き）

時間は平等に流れると言う。なら時間操作系の能力者はどうだろうか？

b yゼクア・シルバーフィールド

五本目

「随分とあっけなかったね、スザク・フェンナルド。まあ『限定奥義…空覆い』をまともに食らって体が残っていることを褒めればいいのか？ それにしても奇妙だね、『空覆い』は結界破壊もあるけど、一時的に時間さえも停滞させて777回の攻撃に匹敵するダメージを与える一応禁呪に近い扱いを受けているんだけどね。」

「まあ、そんなことは置いといて。自己紹介をしていなかったね。《第九階層》『生き残り達の世界』組織【六角天】所属『処刑人兼選別者』吉田 ヨシダ 百夜 モモヤ だよ。持っている字は滅亡制御。最も俺に字 あさな なんて意味が無いけどね。これから死ぬ君にも余り意味の無いものかもしれないね。」

「《第九階層》？『生き残りたちの世界』？何だそれは？何なんだ？我／俺／私／僕は誰だ？ここはどこだ？【六角天】？ああ、何か懐かしいそれだけは聞いたことがある。我／俺／私／ボクノネガイハ akda あ qwse drftgy ふじこ lp ; jofjdnfnks 。」

突如としてスザクだった者が気が触れたようにオカシナ言葉を使い始めた。

その瞬間百夜の第六感にも等しくなった五感がその異常の正体を正確に捉えた。かつて感じたことがあるべったりと肌にくっつきそうになる程の気持ち悪い気配。その気配に百夜は覚えがあった。

「貴様、天使だな？わざわざ瀕死の人間に取り憑くなんてお前らしく無いじゃないか。」

「あー確かに天使っぽい腐った気配だねー。」

「累、今まで何処に行っていた？戦闘の最中スザクになんか言ってから何処にいったのかさっぱり分からなかったぞ。」

「ソレの違和感は何となく分かっていたから最寄りの空中都市型航行船に連絡入れに行ってたのこのサーカスって言ったって一応空中じゃん？中の人とか生きているのか見に行ってたんだよー。」

「それで、応答してくれた物好きな航行船は何だったの？あとどれくらいで着きそうなんだ？それに中の人は？」

「質問が多いよー。『ハバムート級…坂東』『江戸教導館』を中央に据えている空中都市型航行船だよー。それともうそこまで来てるってー。あとこのフネの中の人全員死んでるよ。それでもあと三時間ぐらいの航行には問題がないみたいだよー。」

「そうか」

こんな会話をしながらもちゃんとスザク・フェンナルドを見張っているのは流石だろう。しかし、今回の相手はどんなに腐っていようと天使であったというだけであろう。

ワールドジャック
「『限定的対世界侵食』」

ほんの少しの音量だった。それだけで、体は動かないけれども声は出せる。声は出せるだけで、？力？が練れない。いくら瀕死の肉体とはいえここまで容易く《能力》を展開できるのは流石天使であろう。

天使とは《崩天事変》の時に神を名乗ったある元人間が生み出したまたは改造されたモノの事を指す。一部は創造主に対して反逆し、自立したがいまだに多くの天使が神の復活のために動いている。

そしてここに出現した天使は後者のようだ。

「揭示枠表示、広域発声モード。」

「『マイクテス、——聞いているか？愚民ども。」

天使たる私がわざわざこうして出て来た理由を教えてやろう。

それは単純に《崩天》をもう一度起こす。我らが主たる神をもう一度この世界に呼び出し主が望んだ《大望》をかなえてもらわんが為に。

止められるなら止めてみる。では、さらばだ。』」

そんな衝撃発言が聞こえると同時に、ある男の声が揭示枠から聞こえた。十代後半から二十台ほどのなぜか頼れるような男の声が。

『おい、待ちやがれクソ天使。それは【六角天】に宣戦布告してる
と見ていいんだな？』

「『無論、むしろお主に伝えることが主な内容でもあるぞ、【六角天】八大首領の一人にして八席の第零席にして庭の頂点、吉田 守
霧！』」

『ならテメエの上の奴にでも言っとけ、暴れたらブツ殺すってな！』

「『ふっ、では諸君。いつか殺しあうその日まで元気にしているといい。』」

そう言い放ち天使はスザクのカラダ（器）から抜けて消えていった。それと同時に限定的対世界侵食も解けた。

『百夜、そこにいんだろ？いたら返事をしろ。』
そう声をかけられてふと放心状態からその場の全員が戻った。

「ああ、いるよ。累も一緒だ。」

『依代になった奴は生きてるか？まあ、生きていても死んでいても本部まで運んで来い。』板東』にはこっちが話をつけとくから小型の輸送艇でも貸してもらえ。』

「死んでるよ。それと今サーカスを見に行っていたんだけど、上演会場だった空中上演場の中の人も全員死んでるっぽいんだけど、どうする？」

『いつまで持つ？』

「三時間」

『なら十分だ。』坂東』に乗せてもらって揭示枠の映る範囲にそのフネを映せ。そっから俺がぶっ飛ばしてやる。そして見ておけ。我が真名は全罪を背負う」なんてデタラメな呼ばれ方をしたその後ろ姿と理由をな。

それで十分か？『坂東』艦長兼【江戸教導館】総長兼院長の絹原
災蔵？どうせ聞いているんだろ？』

『んー、まあ、その条件と追加条件でこっちはいいんじゃない？』

『その追加条件は？』

『【六角天】に『坂東』が停泊できる陸港を作ってくんない？それと陸港の使用許可ぐらいかな？』

とふざけているとしか思えない声でふざけているような交渉に及んでいるのは仮にも『坂東』艦長兼【江戸教導館】総長兼院長の絹原災蔵マヌケ見えても教導館館長であるのでこの手のことは強かでないはずがなかった。
しかし、

『そんなぐらいいなら別にいいぞ。』

そんなに容易く条件を飲むとは予想していなかったようだ。

『そんなじゃ、その二人の回収と【六角天】までの運搬よろしく！』

『つつー訳だからさっき言ったことしといてくれよ百夜。累も頼んだぞ。』

そう言って守霧は揭示枠を閉じた。おそらく攻撃の準備に入っただろう。そして残る揭示枠は一つ絹原のもののみで絹原も

『んじゃあ？そろそろこっちに乗ってくれない？もうついてるから？ちなみに四番ゲートね？』

と言って揭示枠を閉じてしまっているのもうココから出るのみとなっていた。

「でもーその前にーあれ（スザクの死体）をどうにかしないといけないねー。」

「そつ、そうだったな忘れていたわけじゃないからな？ いいか？ 忘れていたわけじゃなかったぞ？」

「わかってるよーそんなことー。」

「まあ、さっさと撤収しようか。『生命圧縮術式 ライフコンプレクション 起動 対象…死亡』『奔り 圧縮しろ』」

次の瞬間スザク（元依代）に円環状にいくつもの言語で描かれた文字列が取り付き瞬時にスザクを一枚の符にしてしまった。

「相変わらず早いねえー、生命圧縮術式 ライフコンプレクション。普通十分から三十分は軽くかかるんじゃないかなったつけ？」

「まあ割と得意な術だからな。それよりもさっさと行こうぜ。」

「そうだねー早くしないと守霧さんの攻撃に巻き込まれちゃうねー。」

「笑えねー冗談言うんじゃない。それにもう着いたみたいだぞつと。」

二人が着いたのは空中上演場の船着場でそこにはすでに『坂東』の輸送艦が着いていた。輸送艦の中から案内人らしきメイドが出てきた。

「待ちしておりました。アストラルチルドレン ルナティックデリート 滅亡制御…吉田 百夜様、殲滅詩人…塔霧 累様すでに出航の準備が来ております。搭乗をお願いします。」

「いや、俺たちは親父に映像送んなきゃいけないから輸送艦の上にいるよ。ってことでじゃーねー。」

そう言い放ち百夜はジャンプして輸送艦の上に乗り込んだ（ちゃっかり累も着いてきている）。

「それでは浮上します。」

――しばらくして――

輸送艦が上昇し、上演場の全体が見えたとき百夜が「掲示枠表示、映像モード」と言い守霧に通信を繋いだ。

「見えてる？」

『よし。ちゃんと見えてるからもういいぞ。百夜あんがとな。』

「いやこのまま繋いでおくよ。存分に撃っていいよ。」

『じゃあ、そのままにしておくよ。』

「しかし守霧さんの隔界遠距離攻撃なんて久しぶりに見るんじゃないかなー？」

「まあ、そうだろうな。おっと始まるぞ。」

『？平坦な秩序がもたらされる

あなたは黄金の精神を持たなければならぬ

死　そして再生

世界は機械的に操作を行うだろうか？

？決意は柔らかい衣に包まれる

意思はまた繰り返しを望むだろう

一人でいるのを好むのはよしたほうがいい

古くからの願いは叶えられるのだから？

？人は上昇気流に乗るだろう

大きな数字を手にするのはよしたほうがいい

狂気と知性が調和する

どれほどの血が流れるだろう？

？心は揺るぎなく安定する

全ては因果の流れの中にあるのだ

誰も来ない寂れた場所で

あなたは派手に魂を燃やすだろう？』

『^{フル}四行詩全詠唱』

『^{グレネードメソッド}穿て 叛乱無銘』

その瞬間、世界を改変して撃たれる空間をも揺るがすような荘厳さの光の柱が上演場を貫いた。

――結論。戦闘終了

五本目（後書き）

ゼクア・シルバーフィールドは後々時間操作系能力者として出て来ます。

六本目

パサッ

と書類が紙の束の上に乗せられる音がすると

「ふうー、これで今回の後処理についての書類業務は終わったな。」

とため息をつきながら背伸びする。

どっしりとして実用性を突き詰めたような机の上に乗っている書類には『空中娯楽上演場クラウド虐殺及び天使現界事件』と書かれた書類と『空中都市型航行船【坂東】用陸港建設』についてと思わしき書類が積まれていた。

それらの書類を処理したと思わしき守霧は机に置いてあった茶を飲みながら少し離れたところで作業している自分の副官でもある成城セイジヨウ藍ランに尋ねた。

「藍くーんバカ息子百夜と累ちゃんはいつ頃こっちに來るって言ってた？」

「遅くとも今日の昼頃には帰ってくるかと。」

返事をもらったのにどこか陰鬱な守霧は気配をただよらせている。

「ちゃんと話さないとダメだねーこりゃ、できればどうして『崩天事変』が起こったかなんて話したくなかったんだけどね。」

「仕方ないことかと思えますよ。仮にも天使があんなに堂々と言いつ放ってしまったのですから。」

「まあ来るまでに残った書類を終わらせますか。」

「それがよろしいかと。」

『坂東』所属輸送艦…鎌倉艦内

『もうすぐ【六角天】総合船着場に到着いたします。お二人は降りる準備をしてください。』

女性型の人口音声が珍しく真剣な顔をしている百夜と累のいる個室に響いた。ふと、両者が口を開いた。

「モモっち。『崩天事変』の『大望』って知ってる？」

「いや、俺も親父に聞いたことがなかったな『大望』なんて。」

そう、『崩天事変』について知っている人間は多いけれども何故、『神』と呼ばれているニンゲンが『崩天事変』を起こしたのかはよく分かっていないのが現状だ。

「とりあえず今回の報告書を出したときに聞こう。」

「そうしょっかー。」

「もういつもの口調に戻すのか？」

「まあ、いつまでも気を張っていたら疲れるでしょー。」

「正しいな。」

『坂東』所属輸送艦・鎌倉から降りて見送った後、本部に通じるゲートを通り抜けるとそこでは二人の帰還を知っていたかのようなベスタイミングで自動人形が寄ってきて出迎えた。

「お帰りなさいませ。吉田 百夜様、塔霧 累様。？第零席？吉田様が執務室にてお待ちです。」

なお、報告などは執務室にて受けると言っておられました。こちらのゲートから執務室前に繋がっております。」

それに対して、百夜と累は「ありがとう」とだけ言っただけでゲートをくぐった。

【六角天】第零席執務室

コンコンとドアを叩く音が響く。すると中から

「入っていいぞ。」

と聞こえた。

中にはいると一面黒い絨毯で床を覆われ、部屋の中央には来客対処用と思われる二つのソファと間に置かれた水晶製のテーブルが置かれていた。

「失礼します。『処刑人兼選別者』吉田 百夜及び、『予報士』塔霧 累。「只今先の事件を報告に来ました。」

「はい。いらっしゃい。そのソファに腰掛けていいよ。」

そうソファ―を指差しながら自身も椅子から立ち上がりソファ―に座った。

百夜は座ると同時に余裕があるように見える守霧とは逆に今にも掴み掛らんばかりの勢いで詰め寄った。

「親父、『崩天事変』の『大望』って一体「ストップ。まずは報告からだよ百夜。累ちゃんも同じだよ。」

どうやら累も顔に出さなかったただでかなりあせっていたようだ。

「わかった。報告は即興詠唱でいい？」
と聞くと、

「できるもんならな。」
と返される。

「じゃあ、累お願い。」 「はいはいー、どうせそんなことだろう
とっていたよー。」

不意に表情を変えて

「それでは『空中娯楽上演場クラウド虐殺及び天使現界事件』について報告します。」

といい、息を大きく吸うと。

？殺人⇒対峙、退治↓現界「砲撃？」「以上です。」

「オッケー、わかったよ報告終了ってことでいいよ。主人公お疲れ様。」

「いえ、私は脇役でしたので。」

「そうかい、とりあえずこっからは危険物指定だぞ。それでもお前

ら聞くか？」

途端、空気が張り詰めた。
たっぷり一秒おいて

「もちろん。」

二人とも見事にハモった。

守霧はため息をつきながら、成城にお茶を入れるように頼みながら
こう切り出した。

「『神』と呼ばれた男は現実を見てしまった理想主義者だったんだ
よ。」

結論。神様は理想主義者

七本目

「『神』と呼ばれた男は現実を見てしまった理想主義者だったんだよ。」

守霧はため息をつきながらそう言った。ちなみに、成城はお茶を入れ終えお茶菓子の準備をしているようだ。言われる前に行動する副官として破格の人材だろう。

「現実を見てしまったってそうなる以前の『神』を親父は知っているのか？」

「知っているとも、一応月に一、二度あって遊ぶような間柄だったからな。」

「まったく想像できませんね。」

「そらそうだろ。まあその後、たまたま仲間内の一人が提唱した神州世界対応論ってのを政府と天皇家に了承をもらって行動に移したんだよ。知ってんだろ神州世界対応論とそれを実行した神州世界対応作戦、地脈大改造計画のこと。」

「一応。」

「こんな時代であっても日本が世界に多大な影響力を持っている原因でしたよね。」

「その通りだよ。」

百夜は累の答えに満足そうにうなずいた。

『神州世界対応論』それは

地脈の相において、日本は世界の相を持っている。日本の形状、神州は世界の大陸と対応する。ということを大前提として考え各地を

樺太　　　　　中央・南アメリカ

北海道　　　　北アメリカ

東北地方　　　シベリア

関東地方　　　中央・東南アジア

中部地方　　　北・西アジア

近畿地方　　　アラビア・東ヨーロッパ

中国地方　　　西ヨーロッパ

四国地方　　　オセアニア

九州地方　　　アフリカ

沖縄　　　南極大陸

本州東北から中部はアジア東側。東北沿岸がロシア。富士山はチョモランマを踰し、千葉は東南アジア。関東平野は中国、伊豆半島はインド。近畿は中東であり、紀伊半島はアラビア、中国地方はヨーロッパ、四国はオーストラリア、九州はアフリカであり、北海道は北アメリカ、樺太は南アメリカである。そして沖縄は南極大陸とされる。

というように仮定する理論であり、その理論を利用し、世界の地相を持つ日本は世界の中心である。故に日本の地脈と世界の地脈を密接に接続して活性化し、操作することで今後の世界の趨勢を左右する計画が神州世界対応作戦である。

「ま、今では多少の誤差があるけどね。」

と、昔に思いをはせていても

「そんなことより、そのあとどうなったんだ？」

彼の息子は空気をあえて読まないようだ。

「じゃあ、話すよ？」

『神州世界対応論』を利用して地脈の活性化による該当地域の活性化のために日本の各地と世界各地をリンクさせる作業を『神』と【八席 四王 十二柱】のうちの八人の計九人で行われたんだ。」

「【八席 四王 十二柱】っているっていわれてるけど実際誰も見てないんじゃないの？」

「確かに噂は聞きますけどガセだって言われてますよ。」

「いるよ。たとえば、第一特務のレム・F・スタンピートが【八席】の第七席だったりするからな。」

ブウウウウウウウ

「なんだい？言うな否やお茶を噴き出して汚いなあ。」

「「あったり前でしょう（ですよ）！あんな問題の塊のような奴が【八席 四王 十二柱】う？」」

「【八席 四王 十二柱】なんて皆大なり小なりそんなんばっかだよ。」

ところで、それは置いといて本題は『崩天』そして『大望』とは何かだったね？」

「ああ、でもどうして『神州世界対応論』なんて古い代物が出てくるんだ？今じゃ世界各国と日本の依頼で【六角天】統括しているんじゃないのか？」

「確かにそうだけど、お前は質問してばっかだね……………よし、累ちやん添削の時間だ。推測でいいからなぜか話してみな？馬鹿息子百夜よりいい答えを出してもらえように期待してるよ。」

少し考えるそぶりをしてからあらかじめ答えは決まっていたとでも言うかのような素早さで答え始めた。

「地脈をリンクさせる時に首領と『神』で行った際に地脈を通して【セカイ】に何らかの干渉を受け、手にした？力？それが『崩天』に繋がったからでしょうか？」

守霧は面食らった表情で話した。

「ほぼ正解だよ。一個違うのは【セカイ】にじゃなくて【セカイ】からなんだけどそこは置いておこうか。」

男は一瞬ためを置いて言い放った。

「本題を言うけど、『崩天』とは

そこに在ってそこに無いそんな場所で行われる【世界再生】の儀式
その際に世界崩壊を手段としているのが『崩天』だ。」

そして、と続けてこうも言った。

「『^{カレ}神』が目指した【世界再生】は《セカイの恒久的平和》だったんだよ。」

—— 結論。世界の真実

八本目

前書き

朝食は戦争だー！（副音声…怪光線を吐いてしまえー！）

byとある食堂勤務の構成員

本文

あの説明から一月

チュンチュンと小鳥のさえずりで目が覚めるのがいいのかもしれないが此処は天下の【六角天】本拠地、そうはいかない何せ先の【大戦争】を生き残った敵対者が多くいる組織の本拠地だ。【セカイ】であって世界でない場所にこの本拠地はある。

と、まあ此処の説明はこんなものでいいだろう

俺は【六角天】【二十六文字】五文字目が課長を務める特殊事例対策課、通称…特事課所属の対策官でもある吉田 百夜だ。

【六角天】第一大食堂

【六角天】第一大食堂は【六角天本部】に全部で七つある大食堂の一つで朝食では平均で全体の約四割の構成員が食事を取る場所である。

そんな食堂の一角で俺はパートナーのおとぼけ観察官を発見した。ってあいつ朝からとんこつラーメンかよ、ずいぶん重いもん食ってんなあ。ちなみに俺は和風定食EX（今日は誰が当たるかな？）（三百円）だ。ごく稀に食べた奴が口から怪光線を出す（この怪光線はどの力が元になっているのかさえ分からない本当の意味での怪光線だ。）、正直値段とおいしさでいつも朝はこれを食べている。

ちなみに私は三回怪光線を出した。もう二度と食べるまいと思ってもついつい食べてしまう。怪光線が出る以外は極めておいしい和食定食なのだが、時々非常に食べたくなる。あれってほんとにただの料理なのか？

前に食堂班に聞いたときは泣きながら（絶対に泣きまねだといえるが）なぜかこうなってしまうのです。と言っていたが、あれはワザとやっているな。まあ許されているのだろう。ここは【六角天】。この程度は、序の口だ。

そんなことを考えながら相棒^{パートナー}に挨拶をする。

「おはようさん、累。」

「おはよう、百チン。」

ずるずると麺を食べながらよくはつきりと喋れるもんだ。しかし俺は甘くない。

「そういえば、百チンして「ほあ たっ」痛っ、何すんの。人がもの食べてるときに。」

「口に物が入っているのに喋るなおとぼけ娘。」

そんなこんなで朝食を食べていると累が真剣な表情をして話を切り出した。

「今日課長に呼ばれてるよ。AM9..00に朝食が終わり次第、特殊事例対策課課長室に来いってさ。」

「了か「ウツボアアツアアー……！！！！」今日は誰が引つかかったんだ？」

遠くから「水ー！水ー！」と叫び声が聞こえるが本人ではないだろう。見ると割と親しい間柄である三条寺鵠命^{さんじょうじこくめい}が怪光線^{今日の犠牲にな}を吐き出^{つた}た。

したおそらく俺と同じく和風定食EX〜今日は誰が当たるかな？〜
(三百円)を食べたのだろう。無茶しやがって。
そして食堂班の連中さっきから「やったー」だの「大当たりー」だ
の言っているのが丸聞こえだぞ。

「百チン〜、多分『無茶しやがって。』とか思っているかもしれないけど、思いっきり顔が笑っているよ〜。」

「好きなだけ言え。今日この時犠牲怪光線を吐かずにならずに済むことが(ほぼ)確実にあったんだ。うれしいに決まっているだろう?」

「うっわ〜清々しいほどに外道〜。けれどそんなセリフはフラグだよ〜」

「ふん、好きに言っている。」

そんなこんなで最後の一口を口にした時だった。

「ウツボアアツアアー……………!!!!!!」

俺は通算四回目になる怪光線敗北の証を吐き出した。
負けた。orz

結論…人を呪わば穴二つ⇒人を笑えば穴二つ
後書き

「「貴様ら後でぶん殴る!」」 by 本日の被害者

九本目

朝食後^{敗北}

朝食の時に累から教えられていた百夜と累の二人は特殊事例対策課課長室に向かっていた。

特殊事例対策課とは

主に活動前の【危険遺跡】に対して派遣される調査員達が所属している部署である。（活動を開始した【危険遺跡】に対して武力行使で戦闘もしくは封印をする場合が存在するため腕利きのモノばかり集まって居るため別名…戦闘調査係と呼ばれる。）

【危険遺跡】とは

再構成後の世界に顕れる一種の世界滅亡装置。しかしその正体については詳しく分かっていない。詳しい正体について知っているのは『生き残り』達の中でも上位に位置する人間（例…【八席 四王 十二柱 二十六文字】等）や大規模組織の首領など。

「課長じきじきの召集命令となるとやっぱり【危険遺跡】か【異体】関連かねえ？」

【異体】とは

元々少数が生息していたが極東暦55年に【第23危険遺跡】^{E.C}明星により他世界に存在していたモンスターや一部神話等に登場するモノ達が循体に意識が憑いた状態で多く出現するようになった。因みに倒すと素材が剥ぎ取れる。一部鉱石など貴重品、装飾品として出回ることも多い。危険遺跡から産まれた種類は凶暴性が非常に高く国や企業から討伐対象にされている。

「それしかないでしょう。特務事例対策課が現地の捜査当局を押しのけて割り込むなんて。」

「しかし、もし【危険遺跡】だとしたら一体いくつ目なるんだ【危険遺跡】は。」

「すでに攻略されたのも含めるともう五十後半ぐらいになるんじゃないかな。」

そんなことを話しながら俺達は課長室^{目的地}に向かった。

コンコンと部屋にノックの音が鳴り響く。部屋の主が「入ってきた」と言うのでドアを開いて二人の男女が入ってきた。

「『処刑人兼選別者』吉田百夜呼び出し通りたたいま到着しました。」

「同じく『予報士』塔霧累たたいま到着です。」

すると目線を書類に向け書類を処理し続けながら

「いらっしゃい。そのソファーにでも腰掛けといてこれもうすぐ終わるから。」

しばらくたち、書類を片付けた妙齡の女性が顔を上げた。

「思ったより早かったじゃない。百夜君。」

「朝飯のときに累と合流してそのままなんで。それよりも課長、まだ仮面ひょうとこなんてものかぶってるんですか？」

累も同じように頷いている。

「これはキャラ付けだからね。こんな一人一人のキャラが濃いとこじゃインパクトがないと忘れられやすいんだよ。」

この仮面被ひょうまいっているのがこの特殊事例対策課を上から任されている矢真中胡桃やまなか。今はふざけているただのボディバランスの凄いねーちゃんにしか見えないがその正体は一人で軍の一部部隊（一個大隊程度）と言われている。）を相手できるとさえ言われる【二十六文字】の一人というふざけた存在だ。

「つと、ふざけ合いもここらへんにして本題に入ろうか。そして百夜、人の事をふざけた存在とか言うんじゃないよ。」

ズドンッ！！！！

その発言の直後突如胡桃が手に持っているシエル・ライフル機動殻銃を百夜に向かつてぶちかましその結果、百夜が頭を押さえてうづくまるが何時の事なので誰も気にしない。

それよりも銃で撃たれてうづくまる程度で済んでいる百夜の耐久性に目を見張るべきだと思うがそれはご愛嬌。

シエル・ライフル マニユーバ・シエル・アームズ・シリーズ 機動殻銃とは

機動殻系統の中の銃系統に当たるもので循体を使用して、弾丸を精製し撃ち出すという極めてシンプルな武装。その特性上術式を付与する事が可能。さつき百夜に使用したのはこの特性を利用して【六角天】第三開発部販売強制沈静術式「さっさと反省しなさいVer. 05」を使用したモノ。

「特殊事例対策課が出張るなんてやっぱり【危険遺跡】？それとも【異体】関連ですか？」

この女も自分の夫のことを欠片も気にしちやいねえ。百夜

「いんや、今回ばかりはちよいと違う。」

「じゃ何なんですか？特殊事例対策課が出てくるのを地元俺達の捜査当局は認めたって言うんですか？解体政府ならありえますけど、それでもやっぱり《企業連盟》の肝いりだったりしますし。あつ、もしかして反抗勢力の本拠地を潰してくれとかそんなんですか？」テロリスト

そして百夜よ、もう復活したのか？早いな。と言うより早すぎじゃないか？

「いやそもそも六角天ウチにそんな都合のいい依頼が来るもんかい？来ないだろうよ。それなら多少割高でも企業専属の傭兵メシエナリーにでも頼んだ方が確実だよ。」

「じゃあ、何処なんですか？その依頼をしてきた所は？」

「聞いて驚きな。今回の依頼人は《中華統一連邦》所属の《北京上空都市》のお偉いさん直々のお願いだよ。」

「「はいいいいいいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」」

解体政府とは

極東暦47年に始まった【解体戦争】において企業連盟に武装解除された地域（通称・解体領域）に置かれた《企業連盟》にとって都合がいい政府。解体領域は企業間の一経済戦争《Economic War》（通称・E・W）の舞台にされるので、地域住民たちにとってはいち早く《企業連盟》から抜け出してちゃんとした国家に戻ろうとするテロリズムが横行している。（だいたい地方の片隅で行われるため大都市の人間にはそこまで悪印象は無い。）このことから、解体政府の大問題は、大抵内戦であることが多い。

《企業連盟》とは

極東暦27年頃に軍需企業などによって組織された機関。本拠地はグアム島の近海に浮かぶメガフロート《レヴァイヤサン》。詳しくはまた後ほど

《中華統一連邦》とは

極東暦15年頃に当時の中華人民共和国が朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国を併合する形で成立した国。首都は北京。国内に計六つの空中都市を持つが内二つは【第一次統一戦争】の際に独立都市になっている。

こうして特殊事例対策課は後に「北京死者蘇生事件」という極めて頭の狂った事件に巻き込まれた。

「あつ、因みに断ったら減給な？」それはヒドくないですか？課長？
by百夜&累
特殊事例対策課牛耳っているのは私だよ？あと課長？言うな。by
矢真中 胡桃

結論..任務という名の強制

十本日（前書き）

遅くなりました

十本目

場に緊張した空気が流れテーブルを囲んでいる三人が合図を受けたかのように同時に動いた。それはまさしく一致だと言えるほど揃っていただろう。

「「ロイヤルストレートフラッシュュ！」」

それが賭事^{ポーカー}（イカサマあり）で無ければ。

— とういか貴様ら仕事はいいのか？

後ろに拳を振り上げた侍女服の女性が顔に青筋浮かべながら笑っているぞ？

ゴンツー！！

あーあ、いわんこっちゃない。

— 三分 cooking. じゃなくて三分後

「全く痛いじゃないかリンダこの俺様の偉大な脳味噌が不具合を起こしたらどうするんだい？」

このいかにもウザそうな奴はグライドⅡファナルデイ。^{ワールド・ランク} W・RSS
クラスである機動殻装備槍使いの全領域近接戦闘術師。^{マニユーバ・シチルス}

「つち、さつさと死んだら良かったのに。」

こっちの毒舌侍女服娘はアリアロードⅡリンダ。グライドⅡファナルデイの公認嫁であり、毒舌家の全方位全術師。

「ファルが死ぬべきだという意見には賛成するけど北京上空浮遊都市まであと三時間もあるんだぜ？暇つぶしぐらい必要だろ。」

「うん、あれが死ぬのはどうでもいいけどヤマトは私を蔑ろにした罪で締め落とすよ？」

「流石白峰嫁、過激だな。」

「百くんも一緒になって遊んでたでしょ？それと人の振り見て我が振り直せって諺知らない？」

「ハッハッハ。知っているに決まっているじゃないか。それがどうかした？」

「うん、死ぬ。」

こっちの方がもっと過激だった。

因みに嫁に締め落とされているのが白峰大和しらみね やまとで【六角天】第一特例空戦中隊である『ウイング中隊』隊長を勤める格闘系近接全術師兼機神乗り。

締め落している側が白峰嫁である榊原神津さかきばら かみつ。【六角天】白峰と同じ『ウイング中隊』副隊長を勤める機動殻装備銃を使う遠近両用戦闘術師兼、機神乗り。

最後の二人のうち過激な方が塔霧累。殲滅術師兼予報士。主に使う武器は機動殻装備銃と固有能力。マニユーバ・シガル ユニークスキル

最後の一人は吉田百夜。
以上。

「あれー！ー！？俺のどこだけ説明軽くな！？」

「「「当たり前だろう。」」「」」

「百くん空気を読もうよ」

アホ
百夜はほっというて、

ワールド・ランク
W・Rとは

世界を一つの競技場として見て個々人の戦闘能力の高さをF～SS
+までの19段階に分けて記すやり方（FとEは二段階他は三段階）
。上記以外にも“記すことさえ憚れるモノ達”Mention 通称アウトランカー
と呼ばれるモノ達が居る。Affraid

このカテゴリには【六角天】の【二十六文字】の上位以上の人間が
当てはまる。他には【江戸教導院】学長 絹原 災蔵や《企業連盟
》の盟主 コール・オーコナーなどの戦闘能力がずば抜けて高いが
基本的には温厚な人物から《斬敵》かがやま加賀山 樹しげるなどの存在自体が災
害扱いされる危険人物まで層が厚い。

機動殻装備槍とは

機動殻武装のうちの檣版。機動殻により素体より攻撃力、耐久力、持久力が上昇している。また機動殻武装系統の中では最も多くの小型循環体燃料槽を内部に仕込んでおくことが可能（量産型に限る）。

機動殻武装

機動殻に

持久力が上
ルカートリッジ

また機動殻

型循環燃料槽を内部に仕込んでおくことが可能（量産型に限る）

マニユーバ・シエルクズ
機動殻武装とは

マルチ・ファイター・マード・タンク

当初は携行兵器で機神、M・FやA・Tに対抗するために作られたものだったが、【19年事件】を機に対【異体】兵器としての側面が強くなり、現在では対【異体】兵器認識されている場合が多い。通常武装を改造して素体とし、その上に機動殻を付けることで完成する武装。機動殻のタイプは大まかに分けて重機動殻化と軽機動殻化の二種類があり、素体に最適化させた後、各々が細かな調整を施して自分専用にする。

が強くなり、現在では対【異体】兵器認識されている場合が多い。

通常武装を

と改造して素

し、その

に機動殻を付

けることで
ライト

成

化の二種類があり、素体に最適化させた後、各々が細かな調整を施して自分専用にする。

二時間後

『ただ今当艦は神龍回廊を抜け、中華統一連邦安全保障領域に入りました。なお、北京上空浮遊都市所属の北京中空港に入港するまで三十分ほどかかります。では皆様、本日のご利用まことに有難う御座います。残りの航行をお楽しみください。』

と。アナウンスが流れ、ビジュアルフレーム掲示枠にもその言葉と共に現在位置の案内が表示されている。

回廊とは

エレクトロン

回廊は【異体】やE・ジャマー・クォーツに【解体戦争】によってそれまでの最速移動手段だった飛行機が安全に使用できなくなった（【解体戦争】による影響は企業側が解体した領域のみ）のに代わり、速度は劣るが耐久性、対ジャマー等が勝っている空中航行艦が台頭したが、それでもいちいち相手をしていると、キリが無いため航空系企業と各国が共同で世界各地に作ったもの。

【異体】を避けるために作ったのに稀に内部に【異体】が入り込んでくる回廊がある。（例…神龍回廊、ノースアイランド回廊等）
神龍回廊は出雲〜北京を結ぶ回廊。

「あら？もう着いたの？案外何も無く着いたのですね。」

「この馬鹿どもは結局ずっとポーカーをしてたしね。」

この嫁どもあれから休憩しては凹って、休憩しては凹ってを繰り返したらしい。

下で伸びている旦那^{馬鹿}どもも学習しなかったのか？

「うーん、実は一回だけ龍型【異体】に襲撃されそうになったんだけどねー。」

この嫁いきなり問題発言かましやがった。

「えっ、でも襲撃警報一度もありませんでしたよ。」

「そこで百くん達の話になるんだけどー、【異体】って言っても突き詰めれば循体の集合体が意識を持っただけでしょー。それに回廊^{コウ}

に入ってくる奴なんて循体攻撃による防御なんて紙みたいなもんだってしってるでしょー？」

「「うん／はい」」

「だからワザと航行に支障の無い威力でもって循体攻撃をしてたんだと思うよ。」

「じゃあ、ポーカーをしたのは？」

「特に関係無いと思うよ。」

はい、私刑^{リンチ}フラグ入りましたー。

北京中空港

そこには一般の観光客などに混じって、たんこぶを三つほど重ねた男達とその近くにいた女達が話し合っていた。

「やはりボケ術式は偉大だな。展開している限りあらゆる攻撃をツッコミとして処理して肉体への負荷を可能な限り抑える。やはり偉大だ。」

「しかし私はあまり好かないな。今回みたいにダメージが限界値を越えるところのコブのように襲いに来るからな。」

「恩恵に預かっときながらなに言ってるの？このダメ亭主。」

「あつ、貴様ダメって言ったな？ダメっていったやつがダメなんだぞ。やゝいダメ人間ゝ。」

ブチッと見事に頭の血管が切れたような音と共に白峰と百夜が術式を起動させていた。

「起きろ、『鋼楼』」「『けん剣よつるぎ剣よ 我に齒向いし愚者を潰せ』」

「あつ、あれゝ？二人して何をそんなにマジになってるのかなゝ？」

「『鋼楼』Full Burst」＜イエス、マスター＞

「原初の剣よ。」

「ね、ねえ、や、やめないか？まだ任務まえだぞ。ん？」

「「貴様に」」＜Full Burst！！＞」「言われたくない！！！！」」

「オーバーフロー！」「吼えろ！」

三分後

そこには復活したグライドを含め全員がふざけた顔ではなく、真剣な様子で百夜の話を聞いていた。

「じゃあ予定道理に白峰と榊原は空中都市防衛管理局に行って【異体】退治をよろしく。」

「おう。」「任されたよ。」

「俺達はまずは北京上空政闘院へ向かい其処で今回の怪奇事件の詳しい資料や話等を聞いてからパートナーと移動を開始だ。いいな？」

「おっけー」「ウム」「分かったわ」

「じゃあ何か大きな事件が発生したら連絡するように。以上解散。」

怪奇事件とは

通常では考えられない異常な犯罪もしくはそれに準づる危険行為などを示す。

それまでの怪奇事件の中でも一、二を争うイカレタ事件の解決はこうして始まった。

結論..解決への一歩

十本日（後書き）

読者の皆さんが思いついた能力、道具などあったらぜひ教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322w/>

エデンプログラム～Eden Program～

2011年11月14日20時33分発行